

中学校 道徳 部会

部会長名 添田町立添田中学校 校長 井上 修一
実践者名 大任町立大任中学校 教諭 中西 由恵

1 研究主題

考えの違いから自己の生き方を深める生徒の育成
～思いの視覚化を図り、主体的に表現する活動の設定～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

平成27年3月、道徳の時間は「特別の教科 道徳」へと新たに位置づけられ教科化された。文部科学省は道徳の教科化の趣旨を以下のように述べている。

「－今回の改正は、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである－」

このことは、教育再生実行会議から打ち出されたいじめ対策の第一方針であり、多発化する青少年の問題行動の根幹に、道徳性の低下を指摘しているものである。今回の教科化により、授業を行う教師一人一人に、今まで開発されてきた道徳の時間のよさを活かしつつ、道徳的实践力を育むことができる道徳の時間を構築していく強い意志をもつことが求められている。

(2) 道徳教育の課題から

今日までに道徳教育では大きく二つの成果が挙げられたと言われている。一つは、道徳授業に特有の型が確立されたことである。具体的には、導入でねらいとする道徳的価値への方向づけ、展開前段では読み物資料を使って登場人物の気持ちを共感的に追求し、展開後段ではねらいとする道徳的価値の一般化を図り、終末では、教師の説話を聞くというものである。二つは、道徳授業の本質や特性が学習指導要領で明確に提示されたことである。また、生徒の道徳性に関して「数値などによる評価」を行わない方針を打ち出しているため、生徒は自由にのびのびと道徳授業に参加し発言することができる。しかしながら、これらの成果については同時に課題も見えてきた。まず、道徳授業の型に関しては、「マンネリ化」である。いつも同じような授業のために道徳の授業が楽しいと答える生徒は学年が上がるにつれて減っていると言われている。また、道徳授業の本質や特性に関しては、ねらいとする道徳的価値の理解はできても、生徒が自身の生活体験には活用、応用できていないという課題が挙げられる。つまり、道徳的判断力や道徳的行動力、習慣を指導することができていないと言える。これらのことから、「多様な学びを取り入れた道徳授業を創造すること」「多様な道徳的心情を引き出すことや多角的多面的に考え判断することを重視した授業」を研究していくことが求められている。

(3) 生徒の実態から

現在、大任町では「30歳になった時に精神的にも経済的にも自立した大人になるための礎を築く10年計画」という取組を行っている。生徒たちが大人になった時に

解決困難な課題にも屈することなく立ち向かう心と創造的なアイデアを生む力、そして育ちが異なる他者同士が互いに協働し解決していこうとする資質・能力の育成を目指している。大任中学校の生徒の実態として、一対一の対応では全体的に素直な心をもっている反面、集団の中で自己の考えを主張したり、相手の意見も自分の意見も踏まえて公正に検討したりする力は十分に育っていない。このようなことから、生徒が他者の考えに触れ、よりよい自己の生き方を深めていくことができるようにするために道徳教育が担う役割は非常に大きいと考える。

3 主題の意味

(1) 主題について

「考えの違いから自己の生き方を深める生徒」とは、生徒が理解した道徳的価値や心情について、他者の様々な考えを聞いたり、自己の考えを再検討したり、シミュレーションしたりすることを通して、自分にとってよりよい生き方を見いだしていくことである。具体的には、道徳の授業で学んだ多様な見方やものの考え方を通して、現時点で自分にとってよりよいと考える行いを判断することである。また、実践した結果から感じた心情を大切に自己を振り返り、道徳的価値についての見方や考え方を付加・修正・強化していくことである。このような姿を目指すためには、多様なものの見方や考え方を他者との学びを通して主体的に考えていく必要がある。そのためにも、協働して道徳的価値を深めていく話し合い活動や役割演技を通して道徳的な問題を解決する方法について多面的・多角的に再検討するような表現活動の工夫が必要である。

(2) 副題について

道徳的価値について自分事として考え、自己の生き方を深めていくためには、一人一人が自分の経験をもとに振り返って考えたり、友だちのものの見方や資料における人物の生き方などから多面的・多角的に考えたり、判断したりすることが必要である。そのためには、生徒が自己の思いを表出し、友だちと同じ道徳的問題の中で考えを交流する活動の設定が重要である。

「思いの視覚化」とは、道徳的問題に対しての自己の経験と照らし合わせて考えたものをハート図や心情円盤、付箋などに表すことである。このように、自分の頭の中にある経験やその時に感じた心情を共通理解のしやすいもので視覚化することで、自己の道徳的傾向性を知るだけでなく他者の傾向性も知ることができる。このことが対話を活性化させ、コミュニケーションを成立させると考えられる。

「主体的に表現する活動」とは、思いの視覚化で表出された個々の考えを交流できるように場を設定することである。具体的には、役割演技やシンキングツールを活用した交流活動、道徳的実践のモデリングなどである。

4 研究の目標

道徳の学習において、考えの違いから自己の生き方を深める生徒を育成するために、思いの視覚化を図り、主体的に表現する活動過程の有効性を明らかにする。

5 研究仮説

展開前段から後段において、自分の考えを表現する活動において、道徳的問題に対しての自己の経験と照らし合わせて考えたことを視覚化したものをもとに交流を行えば、それぞれの考えの違いから自己のよりよい生き方について考えを深める生徒が育つであろう。

6 研究の実際

(1) 資料名 資料名『背景画』（楽しい道徳の授業 4 福岡教育大学附属小倉中学校）

(2) 主 題 集団生活の充実 内容項目 C-15

(3) ねらい

- 資料『背景画』の中の生徒同士の衝突を通して、狭い仲間意識にとらわれず、互いに協力して集団の向上に努めようとする態度を育てる。
- 直前に控えた合唱コンクールに向け、学級で大切にしたいキーワードについて話し合う活動を通して、集団を向上させるために必要な要素を追求できるようにする。

(4) 学習指導過程

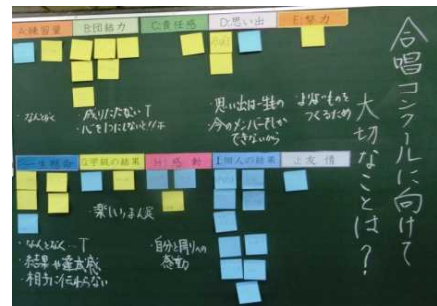
段階	主な活動とねらい	教師の具体的な支援
導入	<p>1 合唱コンクールの練習風景を振り返り、合唱を成功させるために、学級に必要なことについて考える。</p> <p>○ 責任と協力についての気がかりをもつこと</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 合唱コンクールを成功させるために、学級に必要なことは何かについて考えよう。 </div>	<p>※「合唱を成功させるために、学級に必要なことは何か」という課題意識をもたせるために、生徒からの意見をキーワード化して板書する。</p>
展開前段	<p>2 資料『背景画』を読んで、責任と協力の大切さについて話し合う。</p> <p>(1) 一樹と友人たちの言動について考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 一樹と友人たちの「ちょっとまってくれよ」という言動をあなたはどのように思いますか。 </div> <p>○ 自分の役割を一生懸命に果たそうとしているが、その気持ちの狭さに気づくこと</p> <p>(2) 一樹と敬悟の言動から、それぞれ二人の根底にある気持ちについて考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 敬悟の最後の言葉を記入し、なぜそのように思ったのか理由を考えよう。 </div> <p>○ 自分の責任を果たし、よりよいものをつくりたいという気持ちは共通していることに気づくこと</p>	<p>※様々な意見に触れさせるために、一樹と友人たちと敬悟の両方の立場からの意見を出させる。</p> <p>※一樹も敬悟も、責任を果たそうとして作業がはかどらなかつたことに気づかせるために、班で役割演技をさせる。</p>
展開後	<p>3 自分の合唱練習中の態度を振り返り、最初に出されたキーワードをランキングで表し、全体で交流することで、学級に必要なキーワードを決定する。</p>	

段	<p>(1) 個人でランキングを考える。</p> <p>(2) 班で話し合い、班のランキングを完成させ発表する。</p> <p>○ 同じ意見でも理由が異なることに気づくこと</p> <p>(3) 各班の意見を聞いて、学級に必要なキーワードを全体で決定する。</p> <p>○ 協力していくために、自分が何をすべきかを具体的に考えること</p>	<p>※様々な考え方があることを理解させるために、なぜこのような結果になったかを発表させる。</p>
終末	<p>4 合唱コンクールに向けての思いを書く。</p> <p>○ 価値の実現に向け、実践意欲を高めること</p>	

7 指導の実際

導入では、本時のめあてをつかませるために、合唱コンクールの練習風景を振り返らせ、合唱を成功させるために、学級に必要なことについて考えさせた。実際に、合唱の練習期間中に生徒同士のもめ事があり、学級で話をしたばかりだったので、生徒の意見としては、「絆・団結・感動・思いやり」などのキーワードが出された。

展開前段では、資料を活用して、一樹と敬悟が共に自らの責任を果たし、よりよいものを作り上げたいという気持ちをもっていることに気づかせるために、それぞれ二人の立場を班の中で役割演技をさせた。ここでは、役割演技を取り入れることで、文句言いながらも「誰もが一生懸命に取り組みたいと思っている」という意見が出された。その後、自分たちの合唱コンクールへの取組状況を考えさせるために、導入で出された



【資料1：付箋の活用】

キーワード含む10項目について個人でランキングを付けさせた。そして、それらの項目の中で、「とても重要」「あまり重要ではない」を選ばせ、色の違う付箋を活用し、それぞれの意見を黒板貼らせ（資料1）、なぜそのように思ったのか理由と共に発表させた。ここでは、友だちの意見を聞き共感する生徒の姿が見られた。

展開後段では、個人のランキングを班で交流させ、班で得のいくランキングを考えさせ、その理由をもとに発表させた（資料2）。ここでは、各班のランキングの内容について、より具体的な説明を促す生徒の姿も見られた。



【資料2：各班のランキング】

最後に、各班のランキングをもとに、全員で「学級に必要なキーワード」を選び、全員で確認した後、合唱コンクールに向けて、どのような気持ちで挑むのかを本時の学習のまとめとして書かせた。

8 成果と今後の課題

(1) 成果

思いの視覚化させ、そのうえで自己の考えを表現させる場の工夫は、生徒が様々な

考えに触れ、その違いからさらに自己の考えを深めていく上で有効であったと考えられる。今回、それぞれの考えの違いを交流する場をダイヤモンドランキングの表を用いて設定した。班で交流する前に、まずは個人での考えを同じようにランキングさせた（思いの視覚化）ことで、班での交流が活発になったと考える。また、班での交流の際、10項目のキーワードの紙を入れ替えながら話し合いを進めさせたことで、一人一人が話し合いに参加し、自分の意見を伝えようとする姿がうかがえた。授業終末の生徒の感想からは、合唱をみんなで協力して成功させたいという感想が半数以上あり、クラスの一員としての自覚についてより深く考えることができたように感じる。

（2）今後の課題

生徒が主体的に表現する活動の場としてのダイヤモンドランキングについては、活動として見ると、生徒は意欲的にできていた。しかし、生徒に捉えさせたい価値につながる活動になっていたのかは疑問が残る。今回の授業を行うにあたり、内容が特別活動の領域になっているのではなど、教師自身の迷いや悩みが多かった。再度、内容項目を明確にし、ねらいとする価値が何か、また、その価値を理解させるためにどのような交流活動が適切であるかを考えていく必要がある。